



《長刀弁慶》部分 大津絵 江戸中期 / ヴィルブトール蔵
©The Minneapolis Institute of Arts. Gift of H. and E. Spencer

■ 講演会

— ヴィルブトール、ルロワ＝グーランからマティス、ピカソまで —

フランスがもたらした
大津絵の再発見



小川千登《西洋風俗大津絵 南伊太利の飾り馬》大正3年



《為朝》部分 大津絵 江戸中期 林忠正旧蔵 大英博物館蔵
©大英博物館

◎7/28(土) 14:00~15:30 (開場/13:30)

◎講師 / クリストフ・マルケ氏

◎場所 / 福井県立美術館 講堂

◎主催 / 福井県立美術館 福井大学

— 参加無料 事前申込不要(当日直接会場へ) —



フランス国立極東学院(EFEO)院長・教授、大津びわ湖PR大使。
専門は日本美術史、出版文化史、日仏文化交流史。2015年に欧米で初めての大津絵についての著書を発表。その日本語版『大津絵 民衆的諷刺の世界』を角川ソフィア文庫から2016年に上梓。編者に『プリミティブ絵画?—近現代を生きた大津絵』(『美術フォーラム21』36号、2017年12月)等がある。

パリ日本文化会館で開催される『大津絵—江戸時代の庶民絵画—(仮称)』(2019年春)に先立って、フランスと大津絵の関係について講演いたします。洋画家の先駆者浅井忠は1900年のパリ万博を見学したのち、京都で大津絵に出会います。浅井はその素朴でユーモラスなデザインを近代工芸に活かす試みをしました。また明治末期にフランスから帰国した画家が、大津絵は「まるでロダンだ」と述べたという記録もあります。つまり、デフォルメやプリミティヴィズムの波が到来し始めたフランス近代美術との出会いが、大津絵を再発見する契機になったのです。今回は、近代西洋美術に触れた洋画家たちの視点もたらした戦前の大津絵再評価の機運と、当時フランスで大津絵に関心をもったピカソ、浮世絵研究家のヴィルブトール、先史学者ルロワ＝グーランなどについてお話ししたいと思います。